UR PRESS

UR都市機構の情報誌●ユーアールプレス

Autumn 2011 vol.27

特別寄稿

手と心で結び合う 人とまち

「絆」が育む まちづくり 地域づくり

山岡 義典

日本NPOセンター代表理事
法政大学大学院人間社会研究科教授

現場eye

被災者と共に

東日本大震災報道・岩手の地元紙として

太田代 剛

岩手日報社編集局報道部 次長

特集対談 Think Now 第8回

食から生まれる「絆」とは

産地と 子供たちと ともに紡ぎ出すもの

三國(みくに) 清三(きよみ) × 渡辺 真理

オテル・ドゥ・ミクニ オーナーシェフ　フリーアナウンサー

UR都市機構の情報誌 ● ユーアールプレス
UR PRESS
Autumn 2011 vol.27

CONTENTS

01 特集対談 Think Now 第8回
食から生まれる「絆」とは
産地と 子供たちと ともに紡ぎ出すもの
オテル・ドゥ・ミクニ オーナーシェフ 三國 清三
フリーアナウンサー 渡辺 真理

07 特別寄稿
手と心で結び合う 人とまち
「絆」が育む まちづくり 地域づくり
日本NPOセンター代表理事 法政大学大学院人間社会研究科教授 山岡 義典

11 The ひと いま、輝くあの人を訪ねて
囲碁を若い世代に広げたい
広く 深く 一対一で「絆」を生む世界
ダイヤモンド囲碁サロン 囲碁インストラクター 稲葉 禄子

13 現場eye
被災者と共に
東日本大震災報道・岩手の地元紙として
岩手日報社編集局報道部 次長 太田代 剛

17 TownScope タウンスコープ 第8回
世界遺産になった平泉
── 東北復興のシンボル 私のふるさと
岩手めんこいテレビ アナウンサー 千葉 絢子

19 URのしごと
3つの新しい暮らしをつなぐ
「たまむすびテラス」
多摩平の森 ルネッサンス計画2

21 URからのお知らせ

22 編集後記

特集対談 Think Now 第8回

食から生まれる「絆」とは

産地と 子供たちと ともに紡ぎ出すもの

三國 清三（みくに きよみ） × 渡辺 真理（わたなべ まり）

オテル・ドゥ・ミクニ オーナーシェフ　フリーアナウンサー

日本の「食」の生産地では、生産者の高齢化や後継者不足など多くの課題を抱えています。さらに3月の震災は、地震・津波による直接的被害に加え風評被害など、東日本の生産地に大打撃を与えました。そのような状況の中、世界に誇れる日本の「食材」を生かした地域活性化の可能性、未来へつなげる子供たちの食育について、「食」の第一線で活躍されている三國シェフにたっぷり語っていただきました。

おいしさは科学だけではない

渡辺　農業や漁業の重要な拠点を襲った東日本大震災以後「食」がますますクローズアップされています。

三國　1985年頃から「スローフード」や「食育」といわれはじめました。僕たち料理人にとって"食"とは素材のことです。昨年、日本の食料自給率は40%に上がったのですが、3月の大震災でまた30%台に戻ってしまいました。フランスの元大統領のシャルル・ド・ゴールの持論では、自給率が100%でないと先進国ではないといっています。

渡辺　まだ日本は食料の危機管理ができていないということですね。

三國　僕たちは素材がなければ仕事ができません。いまはバターがない。お菓子屋さんやパティシエは切実です。これも震災の影響です。

渡辺　今回の震災で"食べる"ということがとても大事だとみんなが改めて気づきましたが、食材についても教育が基本だと実感します。

三國　僕はフランス料理ですからとくに感じますが、いま丸の内で評判の「エシレ」※1はすごいバターです。農家が手間暇かけて育てた牛から生まれる牛乳を素材に、昔から続く素朴で古典的なバターづくり。生産者と料理人とが信頼しあう、いわば絆で結ばれた食材のひとつでしょうね。

渡辺　フランスやイタリアは以前から政府が食に取り組んでいます。1985年頃からイタリアは地産地消のスローフードを唱え、いわば食と地域を結ぶ絆づくり、フランスは国の財産である子供たちに味覚の価値を教える、美食の国フランスの誇りを幾世代にわたって持ち続ける、いわば時間を超えての絆づくりでしょうね。

三國　そうですね。フランスで子供たちに教えるのは、甘い、酸っぱい、塩っぱい、苦い、の四味です。日本はうま味を加えて五味。このうま味というのは世界でも認められた味覚なのですが、イタリアやフランスは自分が一番だと思っていて、判っていてもいわない（笑）。僕は五味で教えています。

渡辺　うま味は、鰹節や昆布からとった出汁ですね。

三國　そう、うま味はグルタミン酸です。池田菊苗（いけだ きくなえ）※2先生が100年前、ドイツ人の身体が大きいと驚き、まず身体づくりをと食生活の研究をされました。ソーセージやジャガイモも美味しいけど何か足りない。先生は京都の人で、ふと湯豆腐には必ず昆布を敷く、美味しさの元は昆布ではないかと昆布の研究をはじめられたそうです。

渡辺　思わぬ気付きがあったのですね。

三國　研究の結果、昆布からグルタミン酸が発見されました。チーズやトマトにもグルタミン酸は入っているけど、昆布のグルタミン酸含有量は圧倒的で、それで初代の味の素の鈴木社長に商品化を頼むのです。それで味の素ができました。

渡辺　日本人は、知らず知らずにうま味に馴染んでいたのですね。

三國　そう、出汁には昆布だけではなく鰹節を入れる。鰹節はイノシン酸で、それを漉（こ）してもとをつくる、さらにお吸物には海老とかシイタケを入れます。海老はイノシン酸、きのこはグアニル酸をもっていますから、相乗効果で倍々になり、味にまったり感が出るのです。これらは最近になって判ったことで、昔の人は勘だったのですよ。ただ日本も1985年から

※1 「エシレ・メゾン デュ ブール」2009年に東京の丸の内ブリックスクエア1階に出店した、フランス伝統発酵バター専門店。エシレはフランス中西部にある優れた乳製品の産地として知られる村。

※2 京都府出身の戦前日本の化学者。東京大学教授。日本化学会会長。理化学研究所の創立に参画。昆布からうま味成分のグルタミン酸ナトリウムを抽出。（1864-1936）

科学的に安全安心の説明が必要となった、結果はどうかというと、賞味期限の数字を見ただけで捨ててしまうようになりました。昔は舐めてなんともない、いやおかしいという風に、ごく自然に判断していました。僕は北海道人で腐りかけを「あめてる」といいますが、人の五感に頼っていたのです。グルタミン酸がとかイノシン酸がというと味気ないじゃないですか。科学で飯食っているわけじゃない（笑）。でもそういう時代になってしまいました。

8歳から12歳頃までに味で「絆」を結ぶ

三國　僕たちが育った時代は無口な料理人が優れた料理人といわれていました。能ある鷹は爪を隠すといいますが、いまは優れた料理人は爪を出す（笑）。とにかく喋る、テレビには出る、喋ってなんぼという時代です。業界にも抵抗勢力がありますが、僕はバッシングに強いのです。

渡辺　それは風雲児、フロンティアだからでしょう。

三國シェフの原点をつくった北海道増毛町
山も海もある自然の宝庫で、魚介・果樹・米などが豊富
写真提供：増毛町

小学校高学年を対象に、食の楽しさ、地元の食文化の素晴らしさを学んでもらう味覚の授業『KIDS-シェフ』

生産者の名前をメニューに記載したのは三國シェフがはじめて
右下：メニューに書かれている青森県弘前市の成田さん夫妻
右下 写真提供：松木直也(MIKUNI GOGOGO!)

三國　例えばメニューに産地、生産者の名前を載せるのは僕がはじめたのです。アラ プロバンス、プロバンス風というのが通常の書き方でした。僕はだれがどこでつくったと書き加えたのです。最初は「何でそんなことを書くのだ。」と料理評論家から相当バッシングされましたよ。

渡辺　どうして書こうと思われたのですか。

三國　自分の名前が出ると農家の人が喜び、やり甲斐ができる、三國さんのメニューに載ったと。それをデパートが追随し、農家の写真や名前を出すようになり、いまはもう主流になりました。つくる側、買う側、食べる側それぞれに安全安心の信頼感、つまり絆ができたのでしょう。

渡辺　それまでにないことをやると批判が出るものですね。

三國　批判がないと生きていけない、それが僕の栄養素です。くそっと思う性格で、評価されると逆に頑張れない、ダメなのです。

渡辺　いま『子供の間に味を』という先駆的な主張をされています。うま味を実感させ、昔からの味を途切れなく伝えていく、いわば味覚による世代間の絆づくりですね。でも一般に食への関心や意識は良くなっているのですか。

三國　世の中は基本的に理不尽で正義が勝つとは限らない。しかし勝つためにはぶつかりながらも結果を出し続けることが大事だと思っています。

僕と服部幸應（はっとりゆきお）先生で、十数年前から「日本の子供たち8歳から12歳頃までに、甘い、酸っぱい、塩っぱい、苦い、そしてうま味を教えたい、でないと将来の日本を背負う立派な大人になれない。」という思いを持ち、活動をはじめました。しかし多くの学校に無視されました。家庭科の教室をパソコン教室に変えようという時期で、「とんでもない」「なに、お料理？」というわけです。しかしひるまずに全国の小学校に根気強く打診していたら、女性の校長先生が「それは大切よね、ぜひうちに来て。」と応じてくれ、そこから動き出しました。やってみると子供たちがいきいきとなる、先生たちも成果が出ると喜ばれる、給食の食べ残しも減ったのです。

三國　清三（みくに きよみ）
オテル・ドゥ・ミクニ　オーナーシェフ
1954年北海道生まれ。15歳で料理人を目指し、札幌グランドホテル、帝国ホテルにて修業。20歳の若さで駐スイス大使館の料理長に就任。数々の三ツ星レストランにて修業を重ね、1985年、東京・四ッ谷に「オテル・ドゥ・ミクニ」を開店。1999年、ルレ・エ・シャトー協会の世界5大陸トップシェフに選ばれる。翌年、九州・沖縄サミット・福岡蔵相会合の総料理長を務める。料理人の育成や子供の味覚教育にも取り組むなど、料理界の発展に力を注いでいる。

6年前、食育基本法案が成立すると企業が最初に参入してきました。食育といっても前例がないので、僕がモデルになって5～6年、ノウハウが生まれ、子供たちの反応など成果が出てきました。例えば手が不自由な子も参加したいということで、まな板と包丁を持たせたら動かなかった手が動いたのです。みんなびっくりしました。また小麦アレルギーの子供は、粉が風で舞って体に付着するとそれだけで救急車が必要だと、授業中もお母さんが注射器を持って待機していました。しかし全くアレルギーが出ない、お母さんも驚いていましたね。子供たちから学んだのは、ハンデを負った子もみんなで助け合って普通に扱うこと、やんちゃで手がつけられない子供にはこちらがぐっと睨みつけて、彼が目をそらすようだともうこっちのもの（笑）。最後はその子がリーダーシップをとるまでになりました。感動ものですよ。

渡辺　子供の溢れるエネルギーを良い方に向けるのですね。この取り組みはこれからも続けられますか。

三國　ライフワークになるでしょうね。

増毛が育てた「うま味」の味覚

渡辺　三國さんは北海道の増毛（ましけ）のご出身ですね。

三國　母が農家で父が漁師です。農と漁の産品は料理人にとってまさにルーツなのですね。増毛は、高倉健さんの映画『駅 STATION』のロケ地で、本家は網元でニシン漁をしていましたが、昭和28年に増毛の沖にニシンがいなくなり、僕の父親は三男で手漕ぎの船でささやかに漁をしていました。海がしけると漁に出られず、食べものがなくなると干したニシンとかスケソウダラをしゃぶり飢えをしのぐのです。しけのあとの浜にいくと新鮮な魚や海藻が打ち上げられています。ホヤはおやつ、洗って10個も食べればおなかいっぱい、そのホヤが現在の僕につながっています。ホヤはその形状から〝海のパイナップル〟と呼ばれますが、甘い、酸っぱい、塩っぱい、苦い、そしてうま味もあり、僕の味覚はその時にできたと思うのです。

渡辺　ルーツをお聞きしましたが、それ以来、三國さんが辿られた道はどんな道だったのでしょう。

三國　職人は技術といいますが、技術の習得は真面目に10年やるとみんな同じレベルに到達します。そこで技術を越える行為が必要になる、料理人でも僕より高い技術をもっている方はたくさんいる、しかし技術の先にある向上心とか探究心、さらに大切な人に尽くす心は、技術ではありません。お相撲さんは、心・技・体といいますね。それと同じで、よく「俺は修業を重ねた一流の料理人なのにあの客は俺の味をわからなかった。」といいますが、なぜ自分の料理が気に入らなかったのだろうという謙虚な心と、人に喜んでもらおうという気持ちがないと、人に感動を与えられる料理はできないと思いますね。

渡辺　帝国ホテルの村上シェフは、三國さんがまだ料理をつくってもいない段階なのに、食器の洗い方、塩のふり方を見ただけで、「彼はできる」と見抜かれたそうですね。それは生まれながらのものなのか、努力して感覚を研ぎすました結晶なのでしょうか。

三國　僕は1954年生まれで、増毛第二中学校では僕と友人の2人だけが貧乏で高校へ行けず、2人で札幌の米屋に住み込みの丁稚奉公に入りました。とにかく学校へ行きたいので夜間の調理学校へ、それが料理との出会いです。16歳でその米屋さんの紹介で札幌グランドホテルに入りました。正社員はみんな高卒以上です。とにかく好かれないといけない、どうやったら人に好かれるか、本能的に覚えていきました。技術は北の迎賓館といわれる札幌グランドホテル、そして日本で超一級の帝国ホテル、フランスの三ツ星の店を5軒まわったのでなんとか身に付きました。三ツ星のレストランの1軒でも働ければ、それで一生食っていけるといわれるのがフランス料理ですが、それらの名店では、どこも技術以上にホスピタリティが勝っていましたね。

渡辺　それを三國さんは軽々と成し遂げてらっしゃる。

三國　いや、ニコニコやっているだけ、笑わないと福が来ない（笑）。よく弟子には「100歳まで生きるかも知れんが、今日1日は戻ってこないぞ。もっとニコニコやらないと勿体ない。」といっています。

渡辺　三國シェフの笑顔には引きつけられますね。

三國　僕はこれまでに行った、札幌、東京、ヨーロッパ、それぞれで根をはることに努めました。根をはらないと行く所がないからです。好かれることはゴマをすることではない、相手に必要とされることですね。20歳で入った東京のスイス大使館では2年の約束なのがもう2年いてくれとなった。大使館の料理長とは聞こえはいいけど実際は大使ご夫妻のお世話役でした。

国内外に広がる絆づくり

渡辺　その後フランスに渡られて三ツ星クラスの著名レストランで修業され、1982年に帰国、それから国内はもとより海外でも三國さんの料理は高く評価され、日本の三國、世界のMIKUNIになられますが、レストランのほか食に関わる分野でのご活躍も教えてください。

三國　弘前をはじめ10ぐらいの観光大使ですね。北海道のニシンがいなくなった翌年の生まれなので、「おれはニシンの生まれかわり、おれが北海道をなんとかすべえ。」といっていたら、カナダ政府からカズノコ親善大使に任命されました。10年前からは気仙沼のホヤ大使でもあります（笑）。

アジア12ヶ国最優秀シェフ"ボンラック・グレート・シェフズ・オブ・アジア賞"を日本代表の最優秀シェフとして受賞（1996年）

シンガポールの「ラッフルズホテル」にて（1996年）

タイの「ザ・オリエンタル・バンコクホテル」にて（1992年）

渡辺　大使役は、まだまだ増えそうですね。ところで、作物選びは人につきるとおっしゃっていますが、これはどういうことですか。

三國　トマト、キュウリ、キャベツ、どう選べばいいのとよく聞かれます。作物はいわば結果論で、物を買ってはいけません、人を買うのです。すばらしい人がつくるものはすばらしいはず、形に惑わされてはいけない、土壌だって人がつくりますからね。

渡辺　それが顔の見える関係になっていくわけですね。さて10年後20年後に向かって三國さんのビジョンを教えてください。

三國　ひとつは国内の食育です。先だって、弘前でめんこい女の子が僕に話しかけてくれました。「覚えていますか。三國シェフの『キッズシェフ』に参加し、いま弘前大学の大学院生です。食物科の研究員になって社会に貢献していきたい。」というのです。感動しましたね。食育が10年経っていま一代目、その子たちが結婚し子供が生まれ、3つのジェネレーションで引き継いでいくことが僕の夢です。ファーストフードもいいでしょう、でも半分はキチンとした食事も必要。バランス良く、自然に普通に、甘い、酸っぱい、塩っぱい、苦い、うま味の五味を教えていきたいのです。

もうひとつは海外で、この秋に上海の外灘（バンド）にある唯一戦前の日本がつくった西洋建築に、フレンチとイタリアンのレストランを開店します。まず上海で一番有名に、1年以内に中国で一番有名なレストランにしたい。三國の発音は"サンコン"、中国では古典に三国志があるので覚えられやすく、そこで日本の西洋文化とそのパワーを中国人に見せたいのです。みんなは、中国での事業は難しい、別にチャレンジしなくても…と忠告してくれますが、三國は僕一代でつくってきたもの。失敗しても構わないと思っています。前に攻めるのは楽しいじゃないですか。

渡辺　三國さんたちが耕してこられた日本の食が、国内だけでなく海外にまでひろがり、お互いの絆が深まっていくのですね。いいお話が伺えました。本日はありがとうございました。

オテル・ドゥ・ミクニ（HOTEL DE MIKUNI）
TEL 03-3351-3810　東京都新宿区若葉1-18　定休日 日曜日の夜、月曜日
営業時間 12:00〜14:30（L.O）／18:00〜21:30（L.O）　http://www.oui-mikuni.co.jp/hoteldemikuni/

渡辺 真理　わたなべ まり
フリーアナウンサー
1967年神奈川県横浜市生まれ。国際基督教大学（ICU）教養学部卒業。1990年に入社したTBSを1998年3月に退社。同年5月よりテレビ朝日『ニュースステーション』のキャスターとして出演。その後も、フジテレビ『熱血!平成教育学院』、テレビ東京『地球VOCE』、TBSラジオ『JOMO presents 渡辺真理のコトバ遺産〜未来に伝えたいあの一言〜』等に出演。他にも雑誌連載、コラムなど執筆活動も行っている。

全国から集まったボランティアのテント群　石巻専修大学キャンパス

阪神・淡路大震災を機に注目を集めたボランティア、そしてNPO。今回の東日本大震災でも活発に活動を展開しました。今後への期待と課題について、日本NPOセンター代表理事の山岡義典さんに寄稿いただきました。

特別寄稿

手と心で結び合う 人とまち

「絆」が育む まちづくり 地域づくり

日本NPOセンター代表理事
法政大学大学院人間社会研究科教授　山岡 義典

ボランティア・NPOはなにができるのか

ボランティアは個人が社会のために自発的に行う活動のことです。しかしボランティア一人一人では大した力になりません。グループを組み役割を分担することで個々の得意技が発揮でき、かつ交代もできるとなると活動の幅も広がり信頼も増します。それを経常的にやるために組織にする、それがNPO（Nonprofit Organization）です。個人の自発性を基本に、活動の理念と使命を明確にし、利益は求めず、社会に必要な活動を行います。運営には事務を担う人や対外的な交渉を行う者も必要で、活動拠点としての事務所をもつとなると毎月の資金も欠かせません。

今から16年前、阪神・淡路大震災ではボランティアが注目を浴びました。行政は全体をみて公平に進めるので直ぐには身動きがとれませんが、ボランティアは自分の周りで大事と思うことをやればいいので成果をあげました。このような活動を社会に位置付けようという動きから特定非営利活動促進法（NPO法）が1998年3月に成立し、12月から施行されました。もとの名称は市民活動促進法でしたが、立法の過程で市民という言葉はどうかという意見がでて、現在の名称になりました。現在、特定非営利活動法人（NPO法人）は4万3千団体。すべてが社会的な役割を果たしているとはいえないかもしれませんが、多くの人が営利を目的としない組織をつくって活動をしてきたことには、大きな意味があります。

今回の震災でも阪神・淡路で頑張った人や組織が、重要な働きをしています。しかしこの16年間で、経済的には厳しくなり、高齢化も進みました。今回のボランティア活動を困難にしている一番の原因は、災害規模の大きさです。阪神・淡路は東西50㎞に犠牲者は約6000人、今回の東日本大震災は南北500㎞で死者行方不明者は約2万人、面積で10倍、被災者で3倍以上です。またアクセスについても、阪神・淡路の場合は学生を含めた1千万人のボランティアが徒歩で通うことが可能でした。アクセスにバリアがなかった。今回の被災地では大都市圏は仙台だけです。首都圏から行くには宿泊も必要で、当初は新幹線も不通、道路条件も悪くガソリンも供給できない。アクセスコストは恐らく10倍を超えていたでしょう。私は4月初め、学生たちに自分勝手には行かないように、余震もあり津波も来そうな所で学生がバラバラに入ってできることはほとんどないと言いました。被災直後に活動できたのは海外協力系の団体で、災害救援のプロ集団として役割を果たしています。インドネシアの津波被災地や中国四川省の地震被災地にでかけて経験を積んだ団体が、震災の翌日から現地に入ったのです。有給スタッフを抱えたしっかりした組織が、専門的な救援力をもって大きな活躍をしました。バラバラのボランティアではなかったのです。

「絆」は多彩に結ばれる

一般に日本人は、見も知らぬ人に助けられる事に抵抗があります。地域的な結束の固い三陸の沿岸地域ではなおさらで、避難所での助け合いや破壊を免れた隣近所での助け合いが強く、外部からの支援は容易ではなかったと思います。しかし大都市では、仙台でホームレスの支援を行う団体が全国ネットの救援も得ながら活発に活動するような、地域内のNPO活動もありました。日本中で炊き出しができる大きな鍋を持っているのはホームレス支援団体か海外支援団体です。いわば炊き出しのプロです。炊き出しの際に被災者のニーズがわかりますから、救援物資も届けられる。震災後1ヵ月余りは地域も外からの個別のボランティア参加を危惧しました。暫くしてボランティアの受け入れを社会福祉協議会の災害ボランティアセンターを通じて行うようになる。自由な参加が抑えられたようなところもありますが、止むを得なかったと思っています。このセンターの立ち上げには、阪神・淡路で経験を積んだコーディネーターたちが入りこみましたが、こうして4月末の連休以後、外から一般のボランティアも大勢加わるようになったのです。

今回の特徴のひとつに、ボランティア・バス（略してボラバス）があります。中越地震のときにはじまったものですが、今回はこれが多かった。これがなくては大勢のボランティア参加は難しかった。早稲田大学をはじめ多くの大学も出しました。企業人についても、私ども日本NPOセンターがコーディネートして600人余りの人たちを岩手・宮城・福島へ4泊5日で繰り返し送りました。ボラバスの良い面は、バラバラで行くよりコストが安く、誰でも参加しやすい、ということです。事前やバスの中での研修、現地コーディネーターによる適切な現場への配置、そして現地での日常を越えた体験と興奮を共有しながら、その気持ちを吐き出し、参加者には緊密な人間関係が生まれる。同窓会にまで発展することもあるし、何度も繰り返して入り込む人もでてきます。参加形態は企業により様々なようで、勤務として派遣するところもあれば、ボランティア休暇を出すところもある。休暇をとって企業には内緒で行く人もいたのではないかと思います。企業ごとに可能な対応で参加してもらいました。ボランティア教育の良い機会と評価していいかもしれません。しかし個人の自発的な行為が難しく、現地の被災者との人間関係ができにくいことなど、ボランティア活動としては一面的なところもあります。

お風呂もボランティアの手で提供　石巻湊小学校「希望の湯」

写真提供：日本NPOセンター

まだ温もりの残る生活用品の整理がすすむ　陸前高田市

写真提供：多賀城市市民活動サポートセンター

瓦礫の撤去作業のため集まったボランティア　多賀城市

ボランティア作業は主に瓦礫の始末、黙々と作業をやるだけで被災者と出会う機会もない。ボランティアの喜びのひとつは、困っている人に喜ばれるという体験でしょう。避難所に入って何日も被災者と一緒に暮らして顔見知りになり、子供の遊びの相手をして「また来てね」といわれる、そういう関係は数日の集団的なボラバス体験では難しいのです。

ともあれ、多くの人が参加できるボラバスは、ボランティア活動のひとつのあり方を示したと思います。旅行会社のツアーなども良い例です。平泉や花巻温泉に行き、三陸の被災地でボランティアしましょうなどというのもあったようですが、ボランティア体験だけでなく、宿泊や飲食、土産物の購入などで地域経済の活性化にも役立ちます。

絆づくりのネットワーク

今後は被災地域の学生たちが被災した子供たちの勉強を手伝うという学生らしい応援も増えてくるでしょう。いずれにしても長期的に継続する必要があります。それには、被災地内に拠点があることが重要です。石巻専修大のキャンパスでは学生だけでなく全国からの団体がテントを張りました。今後も宮古の岩手県立短期大学などが地域に密着したボランティアを育てていくことを期待しています。

釜石・大船渡・陸前高田などの沿岸部に1時間で行ける遠野が救援の拠点になりました。自衛隊もすぐ遠野を拠点に入りました。多くのボランティアをコーディネートする「遠野まごころネット」は、遠野市社会福祉協議会や地元のNPO「遠野山・里・暮らしネットワーク」が遠野に拠点を置く外からきたボランティア団体などに呼び掛けてつくったネットワーク組織ですが、早期から三陸被災地の救援活動を展開しました。宮城県は仙台が拠点になりましたが、難しいのが福島です。

今回はボランティアも福島には入りにくく、今でも少ない。原発の事故で福島県内や首都圏に移った自治体もあり、常磐線が中断されて海岸沿いのアクセスも難しく、被災地へ多くの人が入り込める状況ではなかった。しかしこの夏休みなど、福島や郡山に避難した子供たちを北海道、沖縄、首都圏などに連れだし、一時的にせよ屋外でのびのびと遊ばせるというような活動がありました。NPOやボランティアの活動において、福島は宮城・岩手とは異なる大きな課題を抱えています。

絆づくりに活躍する世話役

日本NPOセンターでは、現地NPO応援基金を設立して募金をしました。今段階で1億3千万円ほど集まっています。これからは現地のNPO・ボランティアが長期的に力をつけていくことが重要です。それを応援していきたいのです。

「絆づくり」は大都市と農漁村地域とでは違います。また被災後の時期によっても違います。震災の第1段階では避難所における絆づくり、次は仮設住宅での絆づくりです。今はその移行期にあります。それから2年余り後には定住先の復興住宅における絆づくりが重要です。それぞれの段階での課題があります。これから重要なのは仮設住宅における絆づくり。厚生労働省も仮設住宅ごとに生活支援のセンター、溜まり場をつくると言っていますが、現実には住宅だけがどんどん建てられ、人間関係も絆もできない環境が多い。サロンや溜まり場づくりなども試みられていますが、まだ少ない。そこにはお世話をするスタッフが必要です。資格がなくても、被災者で世話好きのおじさんやおばさんでいいので、少額でも有償の、ちょっとしたサポートをする絆づくりのコーディネーターが必要です。仙台での都市型の例ですが、ホームレス支援をやっていた団体が中心になって関連団体に呼びかけ、県の基金などを活用して人材を集め、仮設住宅に派遣する仕組みをつくっています。民間の資金で被災者サポートの研修の場もしっかりとつくろうとしています。実はこの組織は災害発生直前に設立されていたということで、うまくいく事例ではないかと思います。しかし仙台という大都市圏で可能なことで、海岸部の被災地でできる仕組みかどうか、難しいかもしれません。仮設住宅の入居も、公平の原則から抽選となり、集落ごと隣近所一緒にとはいかなかった。そういう中で新たな絆をつくれるのは、地域に信頼のおける世話役の力ではないでしょうか。

行政同士 行政と市民が結ぶ絆

今回、多くの行政機能が失われましたが、東京都をはじめ阪神・淡路大震災の体験を持つ関西の自治体が即座に職員を派遣しました。杉並区などが設置した「自治体スクラム支援室」、大阪など7府県の「関西広域連合」など、自治体間の連携による支援が活発でした。崩壊した自治体には、津波による崩壊と原発避難による崩壊の2種類あります。NPOやボランティアは行政でできないことをやるのですが、今回はその行政本体が機能不全になった。町長や行政幹部が亡くなったり、文書が流れたり破損されたり、コンピュータのデータが全て失われたりして行政機能が麻痺した。このバックアップには、行政職員OBがNPOを組織して協力すれば、大きな力を発揮できるのではないでしょうか。

民間企業もパワーを発揮しています。例えばあるファミリーレストランは直ちに70万食を提供したのですが、お年寄りには揚げ物より煮物などが喜ばれるということがわかり、すぐにメニューを変更し、これを今後の宅配システムに生かすことにしたと聞いています。このように、ボランティア活動を単なる救援に終わらせないことが重要です。

いま東日本では、これから20年位の間に日本社会に起こることが、圧縮されて出現していると思うのです。このような認識を持つと、これからの時代に向けた新しいビジネスモデルが構築できるのではないでしょうか。

寄付文化もかなり進んでいますが、戸惑っている面もあります。多額の支援金が国内外から集まりましたが、これを短期間に使ってしまうのか、もう少し長期的に使ったほうがいいのか、どこにどう配分するのか、議論が必要です。義援金は被災者個人に配分されるものですから、できるだけ早く配布する必要がありますが、この遅れなどの課題も、なかなか改善が難しい。「公平性」には時間がかかるのです。「ふるさと納税」なども、もっと活用できればと思います。自分の出身地だけでなく、ここと思う自治体に対して、使用の目的を絞ってお金を出すことができます。しかも払ったお金の一部が税制措置として還付されますから、善意に一定の見返りが可能です。これも、被災地の外と内を結ぶ強い絆になるのではないでしょうか。

写真提供：少林寺拳法連盟
住宅に入り込んだ泥を搬出するボランティア 多賀城市

山岡 義典 やまおか よしのり
1941年生まれ。東京大学工学部建築学科卒業後、大学院にて都市計画学を専攻し、都市計画の実務に従事。1977年トヨタ財団に転職。1996年日本NPOセンターの設立と同時に事務局長・常務理事就任。2008年より現職。法政大学現代福祉学部教授、同大学院人間社会研究科教授、同大学ボランティアセンター長、同大学院多摩共生社会研究所所長も兼務。主な編著書に、『NPO実践講座』『NPO基礎講座』『時代が動くとき―社会の変革とNPOの可能性』（ぎょうせい）など。

写真提供：鎌倉市民同窓会
全国のまちで開かれた 義援金募集のフリーマーケット

写真提供：鎌倉ガーディアンズ
防犯ボランティアチームも駆けつけて支援を展開

写真提供：多賀城市市民活動サポートセンター
経験豊かなチーム「PEACE PROJECT」による炊き出し

写真提供：なの花交通
市街地の清掃に取り組むボランティアバス参加者

写真提供：なの花交通
千葉からやってきた復興支援ボランティアバス

『碁的』編集長 岩本真理子さんのデザインユニット「MA∞YA(マーヤ)」主催による
コラボワークショップ「フラワー×カメラ×囲碁」(2010年6月)
花冠のつくりかた その作品を上手に撮影するカメラテクニックに加え 囲碁教室も開催
「IGO AMIGO」の王 唯任(おう・ゆいにん)四段による指導で"囲碁ガール"のたまごが増えました

囲碁を若い世代に広げたい

広く 深く 一対一で「絆」を生む世界

ダイヤモンド囲碁サロン
囲碁インストラクター　稲葉(いなば) 禄子(よしこ)さん

稲葉 禄子 いなば よしこ

1969年兵庫県生まれ。6歳で囲碁を覚え、11歳の頃から日本棋院院生として修行。藤村女子高等学校在校時、全国高校囲碁選手権大会の団体戦で優勝するなど活躍。NHK杯、NHK囲碁講座など各種囲碁番組、イベントの司会やアシスタントを務める。テレビ囲碁番組製作者会賞受賞。現在、囲碁サロンの運営をしながら、囲碁指導インストラクターとして、地方や海外での囲碁指導など普及活動に力を注いでいる。

オセロ大会の決勝で男子中学生に負けて大泣きする6歳の少女。その姿を見たご両親が稲葉さんを10歳で囲碁のプロ養成所へ、しかしプロになるには18歳までという厳しい年齢制限があり高校時代に挫折。転機となったのは23歳のとき、テレビ囲碁番組の司会者として抜擢され囲碁の世界へ戻ることになる。

その後、囲碁インストラクターとして活躍する一方で、囲碁サロンの開設運営を機に、若い人たちにも囲碁を広げようという活動を展開。最近では20〜30代に囲碁を広める「IGO AMIGO」というグループとタッグを組み、おしゃれな囲碁をアピール。雑誌『碁的』の発刊や多彩なイベントづくりのサポートに尽力し、昨今話題になっている"囲碁ガール"という言葉の生まれる背景ともなっている。

ダイヤモンド囲碁サロンでは 初心者の入門レッスンから
インストラクターによる指導碁まで会員のニーズに合わせ幅広く対応

「囲碁の教えは、大局観、先を読む力、独創性です。部分を捨てて全体を見る、広い碁盤から状況を深く読み取る。これを仕事に生かしたいというキャリアウーマンも多く、対局後はリフレッシュして帰られます。」また、対人勝負の囲碁の魅力を稲葉さんはこう語る。「囲碁の別称を"手談"と言いますが、これは着手の一つ一つには意味があり会話をするということ。一局打つだけで相手と繋がり親しくなれるし、一対一での頭脳と知力の対決から強い絆も生まれます。」

囲碁は4000年の昔、中国に生まれ、日本でも碁盤が正倉院の御物にもなるという長い時間軸を持ち、世界80ヶ国で愛好されるという広い空間軸をも持つ伝統文化。世界選手権では国際交流の役割も果たしている。近年、高等教育機関が囲碁を高く評価し、東京大学や早稲田大学、慶應義塾大学では、カリキュラムに囲碁が導入されている。

「昔の教育の基本は『琴棋書画(きんきしょが)』といい、琴が音楽、棋は囲碁、書が書道、画が絵を描くことでしたが、いま囲碁だけが抜けています。負けた悔しさを味わう、負けた者をいたわる、それも囲碁の世界です。情操教育の一環としてぜひ取り入れて欲しいですね。」さらに、「今の夢は千代田区界隈を囲碁の街にすること。」と稲葉さんの想いはいっそう熱くふくらんでいる。

平日の夜 仕事帰りの女性会員で賑わう
お酒を飲みながらも囲碁を打つ目は真剣

まるでカフェのような おしゃれな雰囲気
ANAインターコンチネンタルホテル東京 囲碁サロン「Ranca」(稲葉さん運営)

白と黒だけじゃない
色鮮やかなクリスタル碁盤セット

初心者はゲーム感覚で入りやすい
小さな6路盤からはじめてみては

ダイヤモンド囲碁サロン

住　　所　東京都千代田区麹町3-4-7
ビルディング啓4階
地下鉄有楽町線麹町駅
(3番出口直結)
営業時間　13:00 〜 22:00
定 休 日　土・日曜日・祝祭日
電話/FAX　03-3263-0620
http://www.dis15.com/

現場eye Documentary Report 第1回

被災者と共に

東日本大震災報道・岩手の地元紙として

岩手日報社編集局
報道部 次長 太田代 剛

保冷車や消防車が重なり道路をふさぐ中
被災した自宅などに向かう市民
＝3月12日 釜石市大町

（写真は全て岩手日報社提供）

太田代 剛 おおたしろ たけし

岩手県花巻市生まれ。日本大学芸術学部卒業。1996年岩手日報社入社。報道部県警担当、写真部、二戸支局、運動部、陸前高田支局長、報道部県政担当などを経て2011年3月11日から報道部災害担当デスクを務める。

「離れて暮らす娘に、私は無事だと伝えてほしい」

3月12日、陸前高田市の避難所で一人の記者が被災者から託された言葉に、未曽有の大災害でわれわれ地元紙が果たすべき役割の全てが詰まっていた。

東日本大震災で、岩手県沿岸部の市町村は壊滅的な打撃を受けた。死者、行方不明者が恐ろしい勢いで増え続ける一方で、携帯電話やメールなどの通信網や交通網はずたずたに寸断された。

われわれ新聞社もインターネット回線を使った記事送信が不可能となり、記者は写真と記事を本社に届けるため、毎日往復5時間かけて沿岸被災地と盛岡市を往復していた。

一方、地震直後に震災担当デスクに任命された私は、前例のない大災害を前に、地元紙として誰に何を伝えるべきか、判断がつかずにいた。

また、自社の輪転機は停電で動かず、印刷は災害協定を結んでいる青森市の東奥日報社に委託せざるを得なくなった。発行できる紙面はわずか4ページに限定された。全体像すらつかめない情報の洪水の中で、読者に伝えられる情報はごくわずか。明確な理念に基づいた取捨選択を迫られていた。

だが、思考は空回りした。沿岸部では弊社の支局も被災し、陸前高田、大船渡、釜石各市の記者が安否不明となっていた。集中しようとすればするほど、彼らへの思いがこみ上げ、胸を押しつぶし、頭を混乱させた。

当時、編集局内には多様な意見があった。「大きな写真で被害の巨大さを伝える、ダイナミックな紙面」か。それとも「未曽有の大災害の姿を克明に将来に残す『記録』としての紙面」か――。

声を荒らげた激論が交わされ、混乱を極めたその時だった。陸前

津波は瞬く間に街をなめ尽くし
足下に迫ってきた
＝3月11日午後3時30分
陸前高田市気仙町の泉増寺から
陸前高田支局・鈴木多聞撮影

防潮堤を乗り越えて市街地を襲う「黒い波」
車がマッチ箱のように流される
＝宮古市新川街の市役所6階から　宮古支局・熊谷真也撮影

高田市の避難所から戻った記者が、泥だらけの顔で私に報告した。

「被災者が、避難所の壁に張られた名簿で、必死に家族を捜している」「取材相手から『離れて暮らす家族に自分の無事を伝えてくれ』と、必ず頼まれる」

「今、一番大切なのは命です」

最近子どもが生まれたばかりの若き記者の目が、必死に訴えていた。

その通りだった。私自身、破壊され尽くされたまちなみに対する絶望よりも、同僚たちの命を心配する気持ちの方が、はるかに大きかった。

翌13日から、岩手日報社は当時投入可能な全ての記者を被災地に派遣し、「避難者名簿」の取材をはじめた。

記者は、がれきをかき分けて避難所を回り、壁に貼ってある名簿を書き写したり、デジタルカメラで撮影したり、一人一人聞き回ったりして、生存者の名前をかき集めた。

集めた名簿は、運動部や学芸部の記者たちのほか、記者経験のある総務や営業の社員も動員して、朝から晩までパソコンに打ち込み続けた。

彼らはずっと本社で机に向かっていたが、現場を駆けずりまわった記者と同じく、被災地の命に正面から向き合い続けた。掲載した避難者の氏名は、合計約5万人分に上った。

結果的に岩手日報の災害報道は、ほかの報道各社とは多少異なるものになった。限られた紙面の中で、津波に破壊し尽くされたまちなみや、悲しみに暮れる被災者の生々しい写真や記事は、他社に比べ少なかったかも知れない。

一方、「避難者名簿」のほか、食料や水などの在りかを詳報した「生活情報」等の活字情報は、どこよりも充実していたと自負している。

避難所では、それらの紙面を食い入るように見つめる被災者が数多く見られた。記者は、くしゃくしゃになってもまだ回し読みされ続けている新聞を励みに、取材を続けた。

避難者名簿は弊社のホームページ（HP）にも掲載したが、ツイッターやフェースブックなどで全国に情報が広まり、アクセスが殺到。サーバーがダウンし、急きょ全国の地方新聞社と共同通信社の総合サイト「47ニュース」や、全国の地方紙などのHPにコピーを掲載してもらった。

新聞記者になりたてのころ、今は亡き当時のデスクから

「答えは必ず現場にある」

と散々言い聞かされた。単純な交通事故や火災の現場に何度も通わされ、被害者の家族や近所の人たちの声まで取材させられた。

たかだか30行程度の記事になぜそこまでしなければならないのかよく分からなかったが、十数年たった今、やっと答えを見つけた気がする。

岩手日報は岩手の地元紙だ。東京から大挙して訪れて取材合戦を繰り広げ、大方の興味がうせると撤退していく大手メディアとは役割が異なる。

私たちはいま、被災直後と2カ月後に続いて、3度目の「避難者500人アンケート」を行っている。若手を中心にできる限りの記者を被災地に派遣し、被災者一人一人の声を聞いて回っている。

避難所から仮設住宅に移った被災者は、全国から届く支援物資に頼る生活を卒業し、自ら新たな家を建て、漁業を始めとする産業を立て直し、自立しようと精いっぱい頑張っている。

一方、浸水した土地の建築制限区域の早期策定など、復興に向けた課題は山積している。

私たちは被災地が真の復興を成し遂げるその日まで、被災者に寄り添い、ともに歩み続ける報道を続けたい。

記者が避難所で撮影した避難者名簿
メモリーカードを本社に持ち帰り
運動や学芸担当などの記者が朝から
晩まで打ち込み続けた

寒さに耐えながら夜を明かす被災者
＝3月12日夜
陸前高田市の第一中体育館

「ありがとな、ハジ」
涙を流し、愛犬との別れを惜しむ男性
避難所で犬は飼えない
＝4月7日 釜石市・市民交流センター

声を合わせて漁船を陸に引き上げる漁師たち
再建を目指し一歩一歩前へ進む
＝3月30日 宮古市・音部漁港

津波に流されずに残った
防潮堤に手作り看板を
設置した崎浜地区の子どもたち
＝4月10日 大船渡市三陸町越喜来

Town Scope タウンスコープ 第8回

中尊寺 金色堂（岩手県平泉町）
絵：平野 敬則

世界遺産になった平泉
―― 東北復興のシンボル 私のふるさと

千葉 絢子（ちば じゅんこ）
岩手めんこいテレビアナウンサー

1978年岩手県平泉町生まれ。慶応義塾大学法学部政治学科卒業後、2001年、フジテレビ系列の㈱岩手めんこいテレビに入社。アナウンサー兼報道記者として警察・県政・国政関連の取材もしながら、昨年3月まで10年間「mitスーパーニュース」キャスターを務めたほか、3月の東日本大震災では連日24時間体制をとった緊急報道特別番組で被害を伝え続けた。現在は土曜日の情報番組「はちきゅん」でMCを務める。

鐘の音はあらゆる世界に分けへだてなく響き渡り
みな平等に苦しみを抜き去り　安楽を与える
官軍も蝦夷も度重なる戦で命を落とした者は
古来幾多あったろうか
いや　みちのくにおいては　人だけではなく
けものや鳥、魚、貝の類も
昔も今もはかりしれないほど犠牲になっている
霊魂はあの世へ去ったが
朽ちた骨は塵となって今なおこの世に残る
鐘の音が大地を動かす毎に
罪なく犠牲になった霊が浄土に導かれますように

これは、平泉に仏教文化を築いた奥州藤原氏初代・清衡（きよひら）が中尊寺の建立に込めた供養願文です。清衡は、幼い頃より数々の戦乱で父や妻子・友人や家臣を失ったことに深く心を痛め、御仏の教えを信仰する平安な国を平泉に築くことを目指します。その思いは後に子孫に受け継がれ、平泉は100年もの間、争いとは無縁で栄え、京都に次ぐ華やぎを見せていたといいます。

清衡の曾孫にあたる泰衡（やすひら）が平泉を治めていた頃に源頼朝の軍により平泉は滅亡し、主要な寺院や文化財は灰燼（かいじん）に帰したため、今は金色堂をはじめとするわずかな文化財と地下の遺構から当時の姿を想像することしかできません。けれども、すり減った下駄や食器、箸や烏帽子など数々の出土品に、この街に暮らしていた人々の息吹を感じることができます。

突然日常を失った当時の平泉の人たちに思いを馳せる時、大津波の直後に陸前高田市で目にした、足元に転がる食器やピアノのペダル、家の屋根に引っ掛かっているベビーカー、未開封の新生児用紙おむつが同様の光景に映り、半年経っても忘れることはできません。

私は、平泉のなかでも世界遺産に登録された遺跡の一部に生まれ育ちました。地上にあったはずの建物はもちろんすでに失われています。しかし、平泉を訪れたならしばし目をつぶり、耳を澄ませてください。清衡の願文に見られる魂の平安を願う思いは、これから先にこの世に生まれる何人にも侵すことのできない世界遺産であり、いまこそ東北の復興の拠り所となるべき導きであると、確かに信じられるのです。

毛越寺境内 浄土庭園（岩手県平泉町）

多摩平の森
ルネッサンス計画2

3つの新しい暮らしをつなぐ「たまむすびテラス」

1 ルネッサンス計画2 プロジェクトのひとつ「りえんと多摩平」
豊かな自然に包まれた 多世代が交流する団地型シェアハウス
天気のいい日はデッキテラスにあるパーゴラの下でみんなでランチ

多摩平で歴史を刻んだ団地が、3つの新しい暮らしの場としていまに甦りました。

昭和33年に入居が始まった多摩平団地は、団地再生事業により多摩平の森として生まれ変わり、緑に囲まれた自然環境豊かな暮らしが育まれています。この多摩平の森で、「ルネッサンス計画2 住棟ルネッサンス事業」が注目を集めています。団地再生事業に伴い空家になった5棟の建物を、民間事業者3者に15～20年建物賃貸し、各事業者の企画・設計により、"団地型シェアハウス""菜園付き集合住宅""高齢者向け賃貸住宅"という3つの新しいコンセプトで改修を行うという試みです。

それでは、3つの新しい暮らしを訪ねてみましょう。

まずは『りえんと多摩平(東電不動産㈱)』です。従来の1戸が3つの個室に再構成され、若い社会人や学生向けのシェアハウスとなりました。1階にはみんなで使う広いラウンジ、キッチン、ランドリーやシャワールームがあり、明るい声が響きあっています。2棟のうち1棟は中央大学の留学生が入居する国際棟で、外国語が飛び交っています。

目を見張るのは住棟に沿った40mのウッドデッキとパーゴラのあるデッキテラスです。おいしそうな匂いに誘われて近づくと、陽射しを浴びながらお隣近所の仲間とのランチで盛り上がっています。今までになかった団地風景です。また車2台が用意されたカーシェアリングもエコの時代を先駆ける試み。入居にあたっては6人のエディターが公募され、生活しながらイベントを企画・実施し、ブログやツイッターで暮らしのイメージが発信されています。

次は、菜園付き集合住宅『AURA243多摩平の森(たなべ物産㈱)』です。ゆとりある空間を生かし、1階部分には52㎡の専用庭、45区画の貸し菜園や9区画の貸し庭(コロニーガーデン)なども設けられ、野菜づくりや花畑、バーベキューなどが楽しめます。専門スタッフの指導のもと、農具・肥料なども提供され、家族みんなが楽しみながら自然と触れ合うことができ、近隣とのコミュニケーションも深められると期待を集めています。「農」に親しむ暮らしを実践する試みといえそうです。

3つめは高齢者専用賃貸住宅『ゆいま～る多摩平の森(㈱コミュニティネット)』。まず目につくのが建物の外側につけられたエレベーター、他にも車イスでも出入りがしやすいスライディングドアが設けられた住戸など、すべてバリアフリー対応。専門スタッフが24時間365日常駐する小規模多機能居宅介護など、安心して暮らせる仕組みが整っています。地域の方も気軽に利用できる「ゆいま～る食堂」では、今日も楽しげな会話が聞こえてきます。

街区の名称は、世代を超えて人と人、人とまち、周辺地域とのつながりを再構築するという想いを託した『たまむすびテラス』。首都大学東京の学生の提案が採用されました。

8月には、多摩平の森団地自治会主催の恒例「夕涼み会」が開かれました。『りえんと多摩平』のメンバーも子供向けの新企画で大活躍。お祭りと縁日があわさったような賑わいは多摩平の森のこれからの姿を予感させてくれます。

アクセス

8月27日に開催された多摩平の森団地自治会主催の「夕涼み会」
「りえんと多摩平」の入居者(エディター)が企画した
子供向けワークショップ「手で森をつくろう!」も大成功

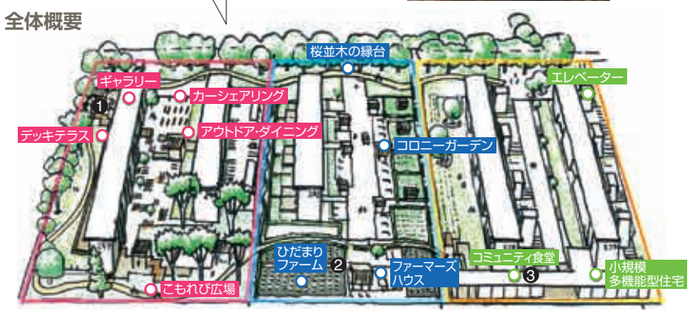
野菜の苗植え体験

2 身近な場所で野菜づくりを楽しめる
まちなか菜園 ひだまりファーム

3 「ゆいま～る食堂」にて入居者同士で乾杯

TAMAMUSUBI TERRACE
たまむすびテラス

全体概要



団地型シェアハウス
りえんと多摩平
東電不動産㈱

菜園付き集合住宅
AURA243 多摩平の森
たなべ物産㈱

高齢者向け賃貸住宅 多世代住宅
ゆいま～る多摩平の森
㈱コミュニティネット

Interview

"とにかく楽しい" シェアハウスでの生活。大きな家族ができました。

りえんと多摩平エディター 松原 独歩さん

僕は建築設計をやっています。今度の大震災で、被災地のまちづくりをどうするかを議論し、その結論のひとつが集合住宅でのシェアハウスでした。その生活を体験しようとエディターに応募したのです。最初にやったことは、皆さんを仲良くさせること。キッチンやラウンジの共用だけでなく、物のシェアということでラウンジに「ご自由に」と漫画を置いたら、すぐ反応があってコミュニケーションが生まれました。

パーティーも開催します。住人のパン屋さんが持ち帰ってくれたパンでサンドイッチパーティー、韓国の方にはコリアンレストランを開店してもらい、土曜のお昼にはオリエントカフェなど、随時個性的なテーマで開いています。外部の関心も高く地域外からの参加も増えましたね。

人数の少ないシェアハウスは人間関係がうまくいかないと住みづらいのですが、逆にこれだけ人数が多いと大丈夫ですね。みんな家族っぽくなってきましたが、入れ替わりも多いので、新しい方をどう迎えるかをいつも考えています。今度、みんなにお国自慢の飲み物食べ物を持ちよってもらって『はじめましてパーティー』をやる予定です。僕は福井ですのでおいしいお酒ですね。

"とにかく楽しい"それが現在のシェアハウス居住者の感想じゃないでしょうか。

ルネッサンス計画2についてはホームページをご覧ください。 http://www.ur-net.go.jp/rebuild/rn2/

募集

全国団地景観サミット2011 UR賃貸住宅『団地景観フォト&スケッチコンテスト』

「全国団地景観サミット」も今年で4年目となりました。

全国で約1700あるUR賃貸住宅には、人がふれあう暮らしの風景や、年月を経て育まれた緑豊かな環境があります。そんな団地ならではの魅力を皆様に発見していただき、写真やスケッチにしてご応募いただくことで、団地が地域の財産として価値あるものであるという認識を、団地にお住まいの方のみならず、地域にお住まいの方々とも共有することを目指しています。

また、団地でのコミュニティ活動や美しい景観作り、環境配慮のための活動など、UR都市機構の取り組みについて、より多くの皆様にお伝えする機会として考えています。

団地での活動、そこに暮らす人の笑顔やふれあい、魅力ある団地景観、季節感あふれる作品をお待ちしています。

団地の子供たち　浅井 誠章さん／辻堂（神奈川県）

ふるさと　佐藤 勝紀さん／平城第二（奈良県）

初夏の昼下り　小沢 節子さん／吉川（埼玉県）

UR賃貸住宅『団地景観フォト&スケッチコンテスト』募集概要

応募期間　平成23年10月10日（月）～平成24年1月10日（火）（最終日消印有効）

審査員（敬称略）
- 千葉 学（建築家）
- 本城 直季（写真家）
- さかた しげゆき（イラストレーター）
- 松田 妙子（NPO法人 せたがや子育てネット 代表理事）
- 池邊 このみ（ランドスケープ プランナー）

応募資格　どなたでもご応募いただけます。ただし、プロの写真家や画家の方はご遠慮ください。

応募方法　郵送にてご応募ください。
- 応募用紙に必要事項を記入のうえ、作品に添えてご応募ください。
- 作品の裏面に名前・タイトルをご記入ください。
- 応募用紙は、UR都市機構ホームページからダウンロードできるほか、全国のUR営業センター等で配布しています※。　※数に限りがあります。

送付先（お問合せ先）　〒103-0027 東京都中央区日本橋1-5-3 5階
「全国団地景観サミット」事務局宛
TEL：03-3272-6098　10:00～17:00（土日、祝日を除く）

応募要項など詳しくはこちらでご確認ください。
UR サミット で 検索　http://www.ur-net.go.jp/urbandesign/

ご案内

平成23年版 環境報告書 まち・住まいと環境

UR都市機構の環境への取り組みをお伝えする環境報告書も6年目を迎えました。より多くの方に読んでいただくために、図表や写真等、詳細データで内容の充実に努めた本編（ホームページ上のみでの公開）と、本編のエッセンスを分かり易い言葉やイラスト等でまとめたダイジェスト版（印刷物）の2分冊で構成しました。ぜひご覧ください。

ダイジェスト版

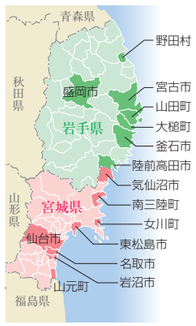
UR 環境報告書 で 検索
http://www.ur-net.go.jp/e-report/

ご報告

震災復興支援組織を設置

岩手県知事からの要請に基づく国土交通大臣からの要請を受け、岩手県では4月中旬以降、被災7市町村に職員を派遣し支援してきましたが、6月に宮城県知事からの要請があったことを受け、震災の復興支援を行う専任の組織として、7月1日付けで、本社に震災復興支援室、現地に宮城震災復興支援事務所及び岩手震災復興支援事務所を設置しました。

10月1日現在、被災市町村における復興計画策定等の技術支援のため、岩手県下被災6市町村（野田村、宮古市、山田町、大槌町、釜石市、陸前高田市）及び盛岡市に職員計22名（釜石市への出向者2名を含む）、宮城県下被災7市町（気仙沼市、南三陸町、女川町、東松島市、名取市、岩沼市、山元町）及び仙台市に職員計23名と特別参与を派遣し、組織を挙げて支援に取り組んでいます。



東日本大震災に関するお知らせの最新情報はホームページをご覧ください。
UR 東日本大震災 で 検索
http://www.ur-net.go.jp/saigai/

情報

投資家等説明会の開催

平成23年7月29日、東京・大手町サンケイプラザにて投資家等説明会を開催。今回は約80名の参加がありました。説明会では、理事長及び理事長代理から、平成22年度決算、当機構を巡る状況及び東日本大震災への対応状況等について説明を行いました。

開会挨拶を行う小川理事長
説明会の様子

UR IR で 検索
http://www.ur-net.go.jp/ir/info_toushika.html

平成22年度 役職員の報酬・給与等

UR都市機構の役員の報酬及び職員の給与の水準等について、総務省の定めるガイドラインに基づき、UR都市機構のホームページで掲載しています。http://www.ur-net.go.jp/koukai/hoshusujun.html

URPRESS Web版がリニューアルしました。

イメージ

UR PRESSのWebサイトをリニューアルしました。「特集対談」、「Theひと」などでは出演者のインタビューなど動画ページを新たに設置しました。また、「タウンスコープ」連動企画として、読者アンケートプレゼントを実施いたします。ぜひご覧ください。

UR PRESS で 検索
http://www.ur-net.go.jp/publication/urpress/

2012年版 UR都市機構カレンダープレゼント!!

UR賃貸住宅や事業地区を舞台にご投稿いただいた四季折々の写真で構成したカレンダーをプレゼントいたします。上記サイトから、ご応募ください。

編集後記

3月の震災発生以降、注目を集めるようになった「絆」というフレーズ。誰もが一度は目にし、耳にし、その意味を問い直したのではないでしょうか。UR PRESSでも、今回「絆」をテーマとして設定しました。人、ふるさと、まちづくりなど、様々な切り口から、「絆」について考えるきっかけになれば幸いです。

今号から、ホームページ上ではスペシャルサイトを展開しています。誌面では紹介しきれなかったこぼれ話など、オリジナルコンテンツも充実しています。アンケートにお答えいただいた方へのプレゼント企画もありますので、是非一度ご覧ください。

季刊「ユーアールプレス・秋号」
Vol.27（2011年10月）
発行　独立行政法人都市再生機構
〒231-8315　神奈川県横浜市中区本町6-50-1
横浜アイランドタワー
Tel. 045-650-0881
Fax.045-650-0889
編集・制作　（株）日本経済社
印　刷　（株）丸庄

10月は住生活月間

街に、ルネッサンス

UR都市機構

みんなで止めよう温暖化

「UR都市機構」チーム・マイナス6%

再生紙を使用しています